

繰り返して問うことと繰り返して答えること ——次の順番における修復開始の一側面——

西 阪 仰

1. 次の順番での修復開始

本報告では、日本語の会話における、いわゆる「修復」の組織について、その一側面に考察を加えてみたい。ここで言う「修復」とは、「会話における発言の産出・聞き取り・理解に関するトラブル」に対処することである (Schegloff, Jefferson & Sacks, 1977)。したがって、例えば、礼儀に反する行動をたしなめることや、意見の食い違いをただすことなどは、それには含まれない。修復は、一般的な言い方をすれば、ある表現を、より明確に、理解可能に、適切に、等々、するために、それを別の表現に置き換えたり、あるいは、それに別の表現を補ったりする操作のことだと言っても、大過はないだろう。ただ、実際には、必ずしも明確化というような言い方がふさわしくないようなやり方で修復がなされることもある。それどころか、ある意味では、より不明確な表現に置き換えられることすらある。また、対処されるべきトラブルの元（トラブル源）は様々でありうる。それは決して、普通の意味で「間違い」「誤り」とは限らないし、逆に、明らかな間違いがあったからといって、それがいつも修復されるわけでもない。さらに、これと関連して重要なことは、修復を行なうことは、実際の会話もしくは相互行為の具体的な展開のなかで、様々なことを成し遂げる。つまり、間違いを直したり、表現を明確にしたりするにしても、そのことがな

ぜそのときに行なわれなければならないのかは、いつもその相互行為に参加する当人たちの間である。ここに報告しようとしていることも、ある特定の形式的特徴を具えた修復がどのような相互行為上の仕事を成し遂げているのかを明らかにすることにほかならない。

会話のリアルタイムな展開のなかで、修復は、一つの過程（セグメント）を構成する。修復セグメントは、トラブル源の比較的近い場所で開始される。修復の操作そのものは、修復セグメントの後方で行なわれる。重要な点は、しばしば、修復の開始を行なう者と、修復そのものを行なう者とが異なるということだ。たいていの場合、修復そのものは、トラブル源の産出者によって行なわれる。それには、もちろん、合理的な理由がある。そのトラブル源によって何が言われようとしていたかは、その産出者にその「所有権」があると一般的に期待されるからだ。もちろん、語られていることの「所有権」が、受け手のほうにあることもある。例えば、第二言語を用いて、その言語を第一言語とする者と話しているときのことを想像するとよい。私の言葉の間違いは、しばしば受け手（その言語を第一言語とする者）によって訂正されるにちがいない (cf. Nishizaka, 1995, 1999など)。

さて、修復の開始がトラブル源の（産出者ではなく）受け手によって行なわれるとき、多くの場合、「トラブル源が産出された発言順番の

次の順番」がそのための機会である。そして、たいていの場合、修復の操作そのものは、その次の順番、すなわち、トラブル源から数えて3番目の順番で行なわれる。わかりやすい例をいくつか挙げよう。おしゃべりの類からとられている。

(1) [FPG 08: 11-13]

01 N: >あたし< 説明べたで 何とも言えない
02 けど:.. hh
03 O: -> ん?
04 N: 説明べただから 何とも言えないけど:=

(2) [KB-3 07: 19-24]

01 F: 三本(.)で いい?
02 A: -> え?
03 F: 日本酒あるんだから三本ぐらい (あればいい?)

いずれの断片も、聞き手が最も簡単な形で「聞き返し」を行なっている。この聞き返しは、直前の発話が何らかの形で修復されるよう促していると聞くことができるだろう。いま「最も簡単な形」と呼んだのは、相手の発言のうちに何かトラブルを見出したことだけは主張しているものの、1) 何がトラブル源であるのか、2) そのトラブルがどのような類のものであるか(聞き取りのトラブルなのか、理解のトラブルなのかなど)については、何も語っていないからだ。しかし、逆に、このような最も単純な形であるがゆえに、その聞き返しのターゲット(すなわちトラブル源)は、その直前の発話にあることがわかる。実際、いずれの断片においても、最初の話し手は、三番目の順番において、自分の元の発言を何らかの形で修復している。

断片(1)では、04行目でNは、01-02行目の発言をほとんど同じ表現で繰り返している。04行目では、01行目冒頭の「あたし」が抜け落ち、「説明べた」のあと、「で」ではなく「だから」

と言われ、「けど」のあと、02行目では、発言の完結性を示すような、はっきりと下に落ちる音調になっているのに対して、04行目では、まだ発言が完結していないかのような音調になっている。このような変更にもかかわらず、私たちは(そしておそらくこの会話に参加している当人たちも)、同じ発話が「そのまま繰り返されている」と聞かだろ(1)。あるいは、Nは、04行目で自分の直前の発言を「そのまま繰り返すこと」をしている、と言ってもよい。「そのまま繰り返すこと」は結局修復ではないと言いたくなる向きもあるかもしれない。しかし、決してそうでない。Nはこの繰り返しをとおして、次のことを明らかにしている。すなわち、03行目の聞き返しにおいてOが主張しているトラブルは聞き取り上のトラブルであったこと、少なくともN自身このように理解していることをNは明らかにしている。

それに対して、断片(2)では、Fは、03行目で、01行目にはなかった「日本酒あるんだから」という表現を付け加えている。そうすることで、01行目の発話の明確化を行なっている。もっとも、何を明確化しているかは、単純ではない。私には、「三本」というのが「ビール瓶」のことであることを明確にしているように聞こえる。たしかに、「ビール瓶」とは言っていないが、「日本酒」と言うことで、「三本」がそれと同種のもののことであることが明確化される。それだけでなく、01行目における「いい?」という問の意味(すなわち、日本酒があるから十分かという問であること)も明確にされていることも注意すべきだろう。03行目のFの発言は、02行目のAの聞き返しが、(聞き取りではなく)理解に関するトラブルにもとづくものであったという、そういうF自身の理解を明らかにしている。

もちろん、断片(1)と(2)で用いられたやり方が、

繰り返して問うことと繰り返して答えること——次の順番における修復開始の一側面

次の順番における修復開始の唯一のやり方ではない (Schegloff, Jefferson & Sacks, 1997; Schegloff, 2000 など参照)。本報告では、より限定的な修復の開始と、それに対する限定的な応答 (修復そのもの) とを扱う。ここで論じられることは、データの数はまだ少ないため、暫定的なことではかない。

2. ターゲットとなる現象

断片(2)の会話 (KB-3) から「次の順番での修復開始」の事例を、全部で10例抜き出してみた。そのなかで、次の二つの事例が私の目を引いた。いずれも矢印の部分が、次の順番での修復開始になっている。

(3) [KB-3 01: 04-10]

01 B: ああ あんで ああれで: あの 僕の
02 知り合いの人が- なんだ 作詞で[:
03 C: [うなぎ
04 うめ::.
05 B: 優秀賞かなんかとったんですよ::.
06 (.)
07 C: ->h- え:::↑作詞?
08 B: 作詞.=作詞家なんですよ:: なんか[いろいろ
09 C: [う:::
10 B: 片桐太郎の事務所で働いたりとか はい.

(4) [KB-3 02: 15-25]

01 B: そしたらなんか、あれらしいすね: もう.
02 そんな- そんなとき ちょうどゴルフ行って
03 たらしいんです, タロちゃんたち.
04 A: ん::
05 B: そしたら .h いざ鎌倉みたいな感じで,
06 .h いざボーイングみたいな感じで, .hh w-
07 もうすぐ途中でゴルフのラウンド? 途中で
08 とめて [も-
09 A: -> [タロちゃんたちが?:
10 B: [タロちゃんたちが.
11 は:::い.
12 C: >ほんで 乗り込みで行くとき, おいおい
13 五番アイアン貸せて,

それぞれの断片における矢印で示した行で、C と A は聞き返しにより修復を開始しているが、いずれも、トラブル源が何であるかをきわめてははっきりと示している。すなわち、直前の話し手の発言のなかの表現 (「作詞」「タロちゃんたち」) をつまみ出し、その発話の語尾を上げ、いわば確認を求めている。そのつまみ出された表現について、何らかのトラブルがあるということが、明らかである (そういうふうには修復開始の発話が構成されている)⁽²⁾。それに対して、いずれも、トラブル源の産出者は、(まずは)修復開始に用いられた表現をそっくりそのまま、ただ語尾だけを下げ繰り返している。

直前の発話を部分的に繰り返して修復を開始するやり方は、いま述べたように、相手に確認を求めるといった形をとるという点で、相手に答を求めるといった修復の開始 (「え?」とか「う?」という聞き返しもそうだし、「どこ?」「誰?」とか「どこに行ったって?」というような聞き返しもそうだ) とは異なる。つまり、この場合、相手 (トラブル源の産出者) は、修復開始者の間に対して、「はい」か「いいえ」で答えることができる。もちろん、部分的繰り返しの修復開始の場合も、(トラブル源ははっきりしているものの) 修復開始者がどのようなトラブルを持っているのかは、それだけ見ても必ずしもはっきりしない。やはり聞き取りのトラブル (とりあえずそう聞こえたけれどほんとうにそう言われたのか確信がない) かもしれないし、あるいは理解のトラブル (その表現が理解できない) かもしれないし、あるいは誤り・間違いの可能性を示唆しているのかもしれない。

3. 部分的繰り返しの修復開始

断片(4)の修復開始は、厳密には「部分的繰り返しの修復開始」ではない。先立つ発言から「タロちゃん」がつまみ出されるが、それに「が」が付されて

いる。しかし、部分的繰り返しに限ってみても、それにより開始された修復がどのように行なわれるかは、多様である。いくつか例を出そう。

(5) [KB-3 05: 18-27]

01 B: () おもしろい(んで) 最終的には
02 事務所の話になるんすよ。(.) たとえば
03 あの.: ケーサー 必ずボーイングになる。
04 ()
05 C: -> ケーサー?
06 B: ケーサーって、あの.: あの.: 化粧品。

(6) [KB-3 05: 29-34]

01 F: それ八じゅっ分あるから だいじょ[(うぶ)
02 A: -> [ん, 八じゅ
03 -> つ分?
04 F: 一本で足りると思うんだけどね。

(7) [TJG 42-46]

01 A: ¥一泊二日でザウスじゃだめか. ¥ h . h
02 B: いっぱつく (hh)
03 ふ(h)つ[かでザウス:(hh)? .hh だ(h)-
04 A: [eheh hh
05 (0.6)
06: だせえ(hh) eheh

断片(5)の05行目でCは、03行目の「ケーサー」という表現をつまみ出し、そのまま語尾を上げることによって、修復を開始している。それに対して、Bは「ケーサーとは何か」を解説している。断片(6)の02-03行目では、01行目の「八じゅっ分」という表現をつまみ出し、そのまま語尾を上げることによって、修復を開始している。それに対して、04行目でFは、「八じゅっ分」という表現の解説を行なうのではなく、発言全体を言い直すことで、01行目の(元の)発言の趣旨を、とりわけ「八じゅっ分あるからだいじょうぶ」という部分の趣旨を明らかにしている。断片(7)は、いくらか複雑である。02-03行目でBは、Aの「一泊二日でザウス」という表現を笑いながらつまみ出し、語尾を上げる

ことによって、修復を開始している。それに対して、Aは、(その表現を解説するのも、自分の言いたかったことを明確にするのでもなく)01行目の提案を自己撤回することで応じている⁽³⁾。

問題は、同じ形式の修復開始に対して、どうしてこのような多様な応接がありうるのかだ。このような多様性は、決してランダムではない。部分的繰り返しが扱っているトラブルには、概ね、次のようなものがありうる。1) 聞き取りの不確かさ、2) 間違い(言い間違い、勘違い)の可能性、3) その表現の意味の不確かさ、4) その表現を含む発話全体の意味の不確かさ。このように4つ並べてみるとわかることは、少なくともこの4つは、一つの順序を構成しているということだ。つまり、それぞれの「可能なトラブル」は、それに先立つトラブルの不在を前提としている。言い間違いの可能性を疑えるためには、聞き取りができていなければならないし、表現の意味が疑えるためには、とりあえず言い間違いではないことが前提となっていなければならないだろう。

さて、そうだとしたら、修復する側(すなわち、トラブル源の産出者)は、部分的繰り返しによる修復開始に対しては、とりあえず、最後のトラブルがあったかのように振舞えば、すなわち、発話全体の意味を明確化するような全面的な言い直しを試みならば、すべての可能なトラブルが一挙に解決できることになる。そうなると、問題は、なぜそのようなやり方が実際にはとられないのか、ということになるのかもしれない。

一つの考え方として、ゴッフマン流の「体面」の仮定を持ち出すことも可能かもしれない(cf. Goffman, 1971; Brown & Levinson, 1979)。つまり、上の4つの可能性は、番号が上がるごとに、トラブル源の産出者および受け手の体面

をより大きく傷つけることになる。だから、もし番号の小さいほうのトラブルへの対処で済まされるのであれば、それに越したことはない、と。会話者たちは、したがって、つねに、どのようなトラブルであるかに関する実際の可能性と、体面を傷つける度合いとを衡量し、最適化を試みなければならない、と。しかし、このような考え方は、直感的にわかりやすくても、結局、部分的繰り返しによる修復開始に対して、トラブル源産出者が行なうべき修復には、いわば適切性の順序づけが、上の番号順にあるらしいと述べているにすぎない。であるならば、このような適切性の順序そのものをきちんと見ておくほうがよいだろう。それは、例えば、次のような事例に見える。断片(8)は産科における妊婦健診の一部である。お腹が小さいと心配している妊婦に対して、医師は、お腹の大きさは、あくまでもお腹の「皮」が太っているだけで胎児の異常には結びつかないと、主張している。

(8) [BB 1]

- 01 医師: いや: でも ほら、皮があんまり ないから。
 02 あの、みなさん お腹頭の皮じゃないけど、
 03 .h 外側が太っちゃって、それで あの::,
 04 .h 大きく見えるのよ。[それで-
 05 妊婦: -> [外側?
 06 医師: -> うん。そう、お腹のそ-皮膚。脂肪.=
 07 妊婦: =[う:::ん
 08 医師: =[要するに、

05行目で妊婦は、医師の発言のなかから「外側」という表現をつまみ出し、語尾を上げることで、修復を開始している。それに対して、医師は、4つの完結した発話単位と一つの完結しない発話単位（「うん」「そう」「お腹のそ-」「皮膚」「脂肪」）による修復を行なっている。さて、この5つの発話単位の順序である。私には、この順番が入れ替わることはありえないように思

う。「外側?」という聞き返しは、それがどのような問であれ、まずは「はい」「いいえ」で答えられる質問である。最初の「うん」は、そのような質問に対する答にほかならない。また、その間は、どのような行為を担うにせよ、まずは確認を求めるという行為を行なっている。「そう」は、それに対して確認を与える行為にほかならない。次の3つは、「外側」の意味を解説している。「お腹のそ-」すなわち「お腹の外側」は、新たな表現による言い直しではなく、妊婦がつまみ出した「外側」に「お腹の」を付け足すことによる明確化を試みている。次の「皮膚」は、それ自体は新しい表現だが、すでに自分の発言のなかで何度か使った「皮」という表現（01行目と02行目）ときわめて近親性の高い表現である。それに対して、「脂肪」はまったく新しい表現による言い直しである。聞き取りのトラブルに対処するだけなら、「うん」だけでよかつただろう。勘違いの可能性に対処するのであれば、「そう」で十分である。何が妊婦にとってのトラブルであるか明らかでないならば、順番に「より弱い」修復から「より強い」修復を順次提示していけばよい⁽⁴⁾。この断片では、妊婦から、その修復を受け止める反応が産出されるのは、「脂肪」の直後である。妊婦からの反応があるまで、医師は順次「より強い」修復を提示しているように見える。私がここで主張したいのは、修復の操作における適切性の順序付けである。

ちなみに、断片(7)における自己撤回は、この順序付けのなかに収まらないように見えるかもしれない。しかし、ポメランツが、観察するように、「え?」というような聞き返しだけでも、返答の遅延に貢献すること、それゆえに、非同意を含意しうること、これを思い出しておくのがよいだろう (Pomerantz, 1984)。

4. 話の主眼を確認すること

それでは、ターゲットとなる現象、すなわち、修復開始に用いられた、その同じ表現をただ繰り返すだけという修復操作は、どのような修復なのだろうか、あるいは何を言っているのだろうか。まず一つのことを確認しておこう。断片(6)から(8)までを比べてみたとき、気づくことは、修復開始において繰り返されている表現は、直前の発言の主眼となる部分である。断片(7)では、修復開始者は、まさに直前の提案の内容をそのまま繰り返している。断片(6)と(8)では、理由として提示されている部分、つまり説明の核心部分(「それ八じゅっ分あるから」「外側が太っちゃって、それで」)が部分的に繰り返されている。

一方、断片(5)では、最初の話し手(トラブル源産出者)であるBが「ケーサー」という化粧品会社を、ある際立ったやり方で提示している。つまり、それを持ち出すことが唐突であること、このことが、「たとえば」という表現および「あ::」という躊躇により際立たされている。いわば、この表現(固有名)について必要であれば修復が開始されるべきであることが、じつはトラブル源の産出のなかに仕込まれている。

だから、逆に言えば(このわずかな事例から限定的にしか言えないが)、特別なやり方で別様に際立たされていないかぎり、部分的繰り返しは、元の発言の主眼に関わる部分の繰り返しである。このことを一つの補助線としておこう。断片(3)も(4)でも、修復の開始に際し、会話の進行のその時点において主眼(に関わる事柄)として理解可能な事柄がつまみ出されている⁽⁵⁾。

次に気付くべきことは、修復開始とまったく同じ表現だけを用いた修復は、意味の解説、明確化になんら貢献していないということである。しかし、その一方で、単に「うん」「そう」と答えるのではなく、あえて同じ表現をそのまま

用いることが何を成し遂げているのか。これが、いま考えなければならないことにほかならない。

さらに、次のことも気付くべきことだろう。すなわち、断片(3)と(4)における修復開始は、いずれも、単に一つの発言の区切りであるだけでなく、一連の発言の区切りとして聞くことのできる場所においてなされている。断片(3)の場合は、じつは、その直前にBは「公募ガイド」なる雑誌に言及している。その「公募ガイド」に出でた公募に応募して「優秀賞」を取った知人について報告している。この報告はそれ自体で語るに値することとして聞くことができる。Cが部分的繰り返しによって修復を開始するのは、この「語るに値すること」が語られたと認識できる場所においてである。断片(4)も同様である。Bは、「ボーイング」なる芸能事務所がいかに大きな権勢を持っているかの一つの例を、語っている。その事務所に所属する大物演歌歌手である「片桐太郎」が、その事務所が銃撃されたとき、「ゴルフのラウンドを途中でとめて」事務所に戻ったという物語を語っている。Aが「つまみ出し」により修復を開始するのは、その物語の終局として認識可能な場所においてである。

だから、断片(3)においても(4)においても「つまみ出し」による修復開始は、その報告なり物語をその受け手が何らかの形で受け止めなければならない場所において産出されている。実際、断片(3)においては、報告の受け手であるCは、最初に「へえ (h- え:::ε)」と驚くことにより、その報告を受け止めている。そのあと、部分的繰り返し(「↑作詞?」)により修復を開始する。じつは、この部分的繰り返しも、「驚くこと」の続きでありうる。驚くべき報告のあと「え、ほんとう?」という聞き返しが、驚くことによりその報告を受け止めることありうるのと同様だ。断片(4)の「タロちゃんたちが?」とい

う（「つまみ出し」による）問についても同じことが言えよう。驚くべき物語が語られたあと、その間によって驚くことにより、その物語を受け止めている。たしかに、Aは、Bの発言が終わるまえに割り込んでいるようにも見える。しかし、Aが「タロちゃんたちが?」と問うのは、Bの物語はすでに終局にあること、しかも、それがどういう終局であるかが、すでに明らかになっている場所である。もし物語の受け手が同調的なやり方でその物語を受け止めようとしているのであれば、物語の終局とともに遅延なくそれを受け止めるべきだろう。であるならば、AがBの物語を受け止めるべき位置として、実際にAがそれを行なった場所は、決して早すぎるわけではない。

（驚くべき）報告であれ（驚くべき）物語であれ、それを受け止めるやり方には、様々ありうる。ただ、「へえ」と言って驚くことをすることもあつし、笑うこともある。さらに、いま聞いた相手の物語もしくは報告と同等の自分の側の物語もしくは報告を語ることもある（cf. 串田, 2001; Sacks, 1992）。物語を受け止めるための、このような多様な選択肢から、相手の発言の一部をつまみ出すことを、あえて行なうとき、それは何を成し遂げているのだろうか。

まず、それは、受け止める側（すなわち「つまみ出し」を行なう側）が、直前の物語なり報告をどう理解したか、そのこと（の一端）を示すことができる。第一に、「タロちゃんが?」ということにより、「タロちゃん」が物語の主眼だという自身（A）の理解が、そこに示される。とくに断片(4)の場合、「タロちゃん」に「が」をつけることによって、「タロちゃん」が物語の主人公であり、とりわけ、ゴルフのラウンドを「途中でとめて」、事務所に戻ってきた本人であるというように、その物語を理解したことが、そこに示されている。実際、「タロちゃん」

のような大物演歌歌手が、「いざボーイングみたいな感じ」で事務所の一大事に駆けつけたことが、この物語の主眼にはかならない。第二に、直前の発言のなかから、特定の表現をつまみ出すことにより、その発言を十分よく聞いていたこと、そして、それを聞いたうえで、その発言の主眼がその表現と関わっていると理解したこと、このことを示している。

この第二の論点について、次の点を確認しておくことは重要だろう。断片(3)で、Cは、Bの発言途中で、自分がいま食べているものの評価を行なう（「うなぎうめ:..」03-04行目）。この評価は、どう聞いても割り込みである⁽⁶⁾。一方、この割り込みは、その直前に現われる「作詞」という表現とかすかに重なってしまう。しかし、この報告の趣旨を捉えるためには、何の優秀賞をかの「知り合い」が取ったかが、はっきり聞かれていなければならない。そのかぎりで、この「作詞」という表現は、この報告の主眼に関わる主要な表現（の少なくとも一つ）である。であるならば、自身の割り込みの直前にあったこの表現をつまみ出し、それをたしかに聞いていたことを示すことは、この報告を受け止めるうえで、きわめて重要である。断片(4)についても次の点に注意しておこう。Bの物語の趣旨をつかむためには、誰がゴルフのラウンドを中断したかが、やはりはっきり聞かれていなければならない。その一方で、その「誰」（すなわち「タロちゃん」）は、「途中でとめて」（07-08行目）からいくらか離れたところ（03行目）で述べられていた。だから、その物語の趣旨をとらえたことを示すのに、その「誰」をちゃんと聞いていたこと、このことを示しておくのもよいはずだ。

それに対して、報告者および物語の語り手は、（すでに指摘してきたように）受け手の（修復開始もしくは報告・物語の受け止めに用いられ

た) 表現をそのまま繰り返す。修復において同じ表現を繰り返すことは、たしかに、断片(1)におけるように、修復開始者のトラブルが聞き取りに関するトラブルだったと、修復者が受け止めたことを示しているかもしれない。しかし、一方、断片(1)と異なり、断片(3)と(4)では、修復開始者は、(当該表現をつまみ出すことで)自分がきちんと聞き取っていたことを、実演的に示している。つまり、修復者による繰り返しは、単に聞き取り上のトラブルの解決への試みであるだけではないにちがいない。それは、いま繰り返されている表現(「作詞」「タロちゃんたちが」)が、まさに主眼であること、そのことに対して確認を与えているように聞こえる。

実際、断片(4)で物語の語り手(B)は、「タロちゃんたちが」という点がまさしく主眼であることを確認することによって、その一連の発言を終了させている。Aが修復開始を行なったあと、Bは物語の続きを語ることはないし、それどころか、そのあとこんどはCが、物語の架空の続きを語ることで、Bの物語を受け止めている(12-13行目)。たしかに、修復のあとBは「は::い。」(11行目)と言うことで、物語の終わりであることを、もう一度確認している。主眼を確認することがすでになされた以上、それは冗長な行為である。しかし、冗長であることには、もちろん、理由がある。最後の肝心の部分には、十分予測可能であるが、しかし、実際には言い切られていなかった(「も-」で途切れている)。だから、そこで確かに物語が終わっていることを、いま一度確認しておくことは無駄ではなかったはずだ。

断片(3)では、修復者(すなわち、元の報告者であるB)は、「作詞」を繰り返すことで、「作詞」が自身の報告の主眼であったことを確認する。そのことによって、その報告が開始した連鎖(報告連鎖)は閉じられる。が、興味深いの

はその直後のBの振舞いである。Bは、「作詞」と言って、その表現が報告の主眼であったことの確認を与えたあと、間を空けずに、すぐに「作詞家なんですよ::。」を付け加える。すなわち、他の会話参加者が発言を始める余裕を与えることなく、「作詞」という活動ではなく、かの「知り合い」(作詞家)へと話題の焦点を移動させていく。じつは、この報告は、その作詞家の知人の受賞そのものが「語るに値すること」として語られていたのではなく、その作詞家の知人から聞いた物語(片桐太郎とその事務所の物語)を語るための予備的発言であったこと、このことがすぐに明らかになる。つまり、Bは、「主眼を確認すること」を(「作詞」という表現を繰り返すことで)行なってしまったあと、ただちに、そこで閉じた報告連鎖が、それ自体で完結したのではなく、次に来るべき何かに従属したものであることを、他の会話参加者たちに示さなければならなかったのである。

このように、(修復開始に用いられた表現の)繰り返しによる修復操作が、主眼を確認することであるという、本報告の主張は、とりあえず、その直後の(本人および受け手の)振舞いによって支持されるように思う。

5. 補足

以上の議論の補足として、次の断片を検討しておこう。BがAに待合せ場所を変更してもらうため電話した。どこで落ち合うかを話し合っているなかで、Aはとりあえず、日比谷線で行くのが、一番金がかからないと言う。

(9) [TB 05: 05-17]

01 A: あの:(1.0) 一番じ- あの金がかかんない。

02 日比谷線で行くのが。

03 B: -> 日比谷線?

04 A: 日比谷線。

05 B: -> 日↑比谷線

繰り返して問うことと繰り返して答えること——次の順番における修復開始の一側面

- 06 A: 日比谷線。
07 B: 日比谷線で行く: のは:, (.) え? あ, はい
08 はい どこだっけ=ええと ええと えっと:
09 何だっけ:。
10 A: ((f)) 中目黒:↑((f))
11 B: で乗り換えて:。
12 (0.4)
13 B: [か]。
14 A: [た]だ:, 別に: あれでいいよ。溜池山王
15 でいいよ:。

03行目でBは、部分的繰り返しにより修復を開始している。それに対して、04行目でAは主眼を確認していると言ってよいだろう。いくつか、駆け足で述べておこう。まず、02行目におけるAの「日比谷線」という発声のしかたから、聞き取り上のトラブルがBのトラブルだったとは考えにくい。また、この断片の場合、断片(3)と(4)と異なり、Bによりつまみ出された表現(「日比谷線」)は、Bの修復開始の直前にある。さらに、内容的に、たしかに、「日比谷線」は、Aの最初の発言の主眼であるが、とくに驚くべきことが語られていたわけではない。Bは、03行目の部分的繰り返しによって、聞き取り上の確認を求めているわけでもないし、だからといって、驚くべき報告を驚くことにより受け止めているわけでもないように思える。

しかし、Aは、04行目で、Bの部分的繰り返しをそのまま繰り返している。つまり、「日比谷線」が主眼であったことの確認を与えている。それに対して、05行目でBはふたたび「日比谷線」を、こんどは強調した形で繰り返す。強調した形で同じこと(と認識可能なこと)を行なうことは、しばしば、直前の反応を不十分なものとして拒絶することを含意する。例えば、誰かに呼びかけたあと、その人が気のない返事をしたとき、私たちは、しばしば強調した形で呼びかけ直す。このとき、その気のない返事を不

十分なものとして拒否している。これと同様、05行目のBによる「日比谷線」の繰り返しは、直前の「主眼の確認」を、03行目の部分的繰り返しによる問への返答としては不十分であると退けている。しかしながら、Aは06行目で、その退けられた返答をふたたび与える。つまり、こんどは、Aのほうが、Bによる返答の拒否を拒絶している。

Bは、次いで(07-09行目で)、「日比谷線」で行くということの意味を問うている。私には、Bのこの(いくらか混乱した)問は、03行目で彼が試みたことの「やり直し」のように聞こえる。つまり、03行目の部分的繰り返しは、「日比谷線」が意外なものであったことを主張するとともに、「日比谷線」だから何なのか、つまり、だからどこで落ち合えばよいのかについて、敷衍を求めるものであったこと、このことがいまや明らかにされるのである。それに対して、Aが拒絶したのは、まさにこのような敷衍を行なうことであったことも、いまや明らかになる。実際、「日比谷線」は、01-02行目の発言のなかでは主眼であったことにちがいないとしても、落ち合う場所についての話し合い(というその発言が埋め込まれている活動)全体のなかで「日比谷線」はむしろどうでもよいものだった。現に、14-15行目でAはそのことを明らかにする(「別に: あれでいいよ。溜池山王でいいよ:。」)。だから、Aはあくまでも、「日比谷線」が直前の発言の主眼であったことの確認を与えることで、「日比谷線」に関するやりとりを閉じようとしていたと言えよう。

6. 結論にかえて

修復の開始および修復の操作は、修復だけではなく、様々なことを行ないうる。本報告は、その一つについて、いわゆる「次の順番における修復開始」により始められる修復のための連

鎖について、とくに修復が「主眼であると確認すること」を行なうものであることを示そうと試みた。とはいえ、ここで扱った事例の数はまだあまりにも少ない。部分的繰り返しによる修復開始もしくは「つまみ出し」による修復開始のあと、実際にどのような修復操作が（トラブル源の産出者により）なされるかなど、さらに多くの事例のなかで検討しなければならないだろう。

本報告は、その議論の過程において、部分的繰り返しもしくは「つまみ出し」により開始された修復の操作が、それでも多様であり、しかもその多様さのなかに一定の秩序があることを示唆した。この秩序の解明も、重要な次の課題となりうらと思う。

注

- (1) この変更の理由については、ここでは推測的なことしか言うことはできない。まず、01行目冒頭の「あたし」という表現は、その直前の一連の発話との、ある断絶を際立たせているように見える。この直前では、Nはテレビドラマの説明をしていた。断片(1)の01-02行目の発言は、もはやその説明そのものの外に立ち、その（自分の）説明に対するコメントになっている。一方、04行目における言い直しにおいては、すでにドラマの説明そのものから遠のいており、このような断絶の標識はもはや不要かもしれない。それに対して、「で」と「だから」には、明確さの違いがあると言われる向きもあろう。このような明確化が起きたとしたら、それは次の事情によるように思える。01行目の発話が「あたし」から開始されるとき、「で」の意味は明確だったが、「あたし」の脱落とともにそれは幾分不明確になるにちがいない。だから、「あたし」の脱落とともに「で」を、より明確な「だから」に置き換える必要があった、と。あるいは、もう一つの可能性として、「あたし」が脱落したあと、発話全体の長さを元の発話の長さに揃えることをしているとも考えられよう。
- (2) 断片(4)の場合、トラブル源は、03行目の「タ

ロちゃんたち」というより、むしろ、05-08行目の発話全体と言うべきかもしれない。すなわち、09行目でAは、「ゴルフのラウンドをとめた」のが誰なのかを明確化するために、その「誰」について理解候補を提示していると言うべきかもしれない。この点については、後述参照。

- (3) この断片について注意しなければならないのは、03行目の修復の開始のあと、Bは「だ(h-)」と笑いながら何かを言いかけ、中断している。06行目のAの（笑いながらの）「だせえ(hh)」は、このBの「だ(h-)」を受けたものとして構成されている（「だ」から始まる表現を用いていることと、笑いに同調している点において）。もちろん、03行目でBが「だせえ」と言おうとしていたかはわからない。「だめ」と言おうとしていたのかもしれない（01行目でAが「だめ」という表現を用いているので）。一方、この「だ」から始まるはずだった発話は、始められただけで消し去られている。したがって、03行目の発言順番全体は、修復の開始だけを行なっていると、とりあえず見ておこう。
- (4) ここで「より弱い」「より強い」と言っているのは、もちろん、トラブルの順序付けとの対応においてである。
- (5) 断片(4)のAによる修復開始は、すでに述べたように、厳密には、部分的繰り返しではない。それでも、「つまみ出し」による修復開始に、トラブル源の産出者が、その修復開始に用いられた表現と同じ表現を繰り返すという点に、まずは注目したい。
- (6) もちろん、ここでCが割り込みを行なう理由もある。Bは、断片(3)に先立ち、「公募ガイド」なる雑誌に言及していたことは、すでに述べた。だとすると、自分の知人が「作詞で:」（02行目）とBが言った時点で、その「知り合い」が何かに応募して採用されるか受賞するかしたことが予測できる。そして、これはある種の「自慢」と聞くことも可能だろう。このCによる割り込みは、自慢への抵抗と聞くことができる。また、自分が「いま気付いたこと」は、その気付いた直後に述べることができる。とくに「重要なこと」として認識可能であるようなことであれば、相手の発言に割り込むことが許される（「頭にスズメバチが止まっている!」など）。もっとも、「うなぎ」が「うま

い」ことが、そのときにどれほどの重要性を持ちえたかはわからない。が、いずれにしても、Cの割り込みには、「合理性」がまったく欠けているわけではない。

文献

Brown, Penelope & Stephen C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. Cambridge University Press.
Goffman, Erving. 1971. *Interaction Ritual*. Penguin.
串田秀也. 2001. 私は－私は連鎖: 経験の「分かちあい」と共－成員性の可視化. 『社会学評論』52(2): 36-51.
Nishizaka, Aug. 1995. The Interactive Constitution of Interculturality: How to be a Japanese with Words. *Human Studies*, 18: 301-326.

Nishizaka, Aug. 1999. Doing Interpreting within Interaction. *Human Studies*, 22: 235-251.
Pomerantz, Anita. 1984. Agreeing and Disagreeing with Assessments: Some Features of Preferred/Dispreferred Turn Shapes. In J. M. Atkinson & J. Heritage (eds.), *Structures of Social Action*, pp.57-101. Cambridge University Press.
Sacks, Harvey. 1992. *Lectures on Conversation*, 2 vols. Blackwell.
Schegloff, Emanuel A. 2000. When 'Others' Initiate Repair. *Applied Linguistics*, 21: 205-243.
Schegloff, Emanuel A., Gail Jefferson & Harvey Sacks. 1977. The Preference for Self-Correction in the Organization of Repair in Conversation. *Language*, 53: 361-382.